

地域交流牧場全国連絡会（交牧連）のメンバーとして活動する川上哲也さん。都市近郊での酪農を基盤に、酪農体験や情報発信を通じて理解醸成に挑んでいる。SNS や音声配信など、デジタルツールも駆使して「伝える酪農」に取り組む川上さんに、酪農との出会いや交牧連への想い、そしてこれからの展望について聞いた。

酪農の道に進んだきっかけは？

小学生の頃から「将来は酪農家になりたい」と思っていました。実家は農家ではなかったのですが、牛に関わる仕事がしたいという気持ちが強かったんです。

その後、鳥取県の農業大学校に進学し、今の妻と出会いました。卒業後は北海道で居抜き牛舎を購入して新規就農しようと考えており、そのための資金作りに加え、酪農の現場をより広く深く学ぶために、鳥取県で2年間、酪農ヘルパーとして働いていました。

そんななか、妻の実家に挨拶へ行ったとき「うちで就農しないか」と義父から声をかけてもらい、23歳で結婚して就農しました。

シリーズ 酪農と地域を盛り上げるユース達

声でつなぐ 酪農の魅力

酪農教育ファームを始めた経緯は？

就農した翌年に、酪農教育ファームの認証を取得しました。うちは都市近郊にある牧場なので、近所の方々の理解を得るためにも、酪農教育ファームが重要だと感じました。

最初は地域の小学生や幼稚園児を対象に、酪農体験をたくさん行なっていました。ただ、その活動のなかで「なんとなく来て、なんとなく帰る」だけで終わってしまう子ども達も多く、もう少し“伝え方”に工夫が必要だと感じるようになりました。

交牧連に加入したきっかけは？

おそらく SNS か広報紙で活動を知って、認証を受けた流れで加入しました。自分一人で初めて「出前搾乳体験」を実施したときのことは、今でもよく覚えています。真夏の猛暑のなか、牛を連れて行ったのに、参加者があまりにも無関心で、「一体何をやっているんだろう」と途方に暮れました。



川上哲也さん

島根県出雲市 川上牧場

【概要】

牧場名：川上牧場

交牧連：近畿・中国・四国ブロックユース

代表：川上 哲也さん（38歳）

従事者：本人

経産牛頭数：45頭、育成・未經産牛・和牛 30頭



川上さんは日々の活動を SNS や音声配信を活用し発信している

そのときに、ただ体験を提供するだけでは伝わらない、体験者の“やる気”を引き出すことが必要なんだと痛感しました。

コロナ禍を機に始めた情報発信の取り組みについて教えてください

酪農体験が難しくなったコロナ禍のタイミングで、「このままではやばい」と強く感じました。牛乳の消費も落ち込むなか、体験だけに頼るのは限界があると気づきました。

そこから音声配信を毎日行なうようになり、SNSやYouTubeでも積極的に発信を始めました。その情報を見て、酪農体験の問い合わせをいただくようになったのですが、体験希望者の方には、事前に酪農の現実やリスクについてしっかりと説明するようにしています。そのうえで本当に酪農に興味を持ち、理解を深めたいと考えている方に、より質の高い体験を提供したいという思いがあります。

「地域との関わり」については、どのように捉えていますか？

今の時代、「地域＝地理的な場所」ではなく、もっと広く「関係人口」を増やすことが重要だと考えています。SNSや音声配信を通じて、酪農に関心を持ってくれる人と全国でつながることができるようになったのは大きいですね。

例えば、自分一人の発信に限らず、音声配信でつながったアーティストの方に酪農テーマの楽曲を作ってもらい、それを歌ったり、演奏して投稿するキャンペーンなども企画しました。

酪農に関係ない人達を巻き込んで、“伝える側”になることこそが、業界の持続性につながると思っています。

交牧連の目的をどのように捉えていますか？

私が考える交牧連の目的は、酪農理解醸成活動を単なるボランティア活動ではなく、酪農経営の“収益の柱”にすることです。

今は全国の酪農家から活動の支援をいただいています、それに見合った“還元”ができていないと感じる部分もあります。

酪農教育ファームのような取り組みは、衛生管理の水準も高いし、生乳の価値を高める活動でもあります。だからこそ、それがきちんと収益につながるような仕組みに変えていきたいと考えています。

クラブユースで、どんな動きをしていきたいですか？

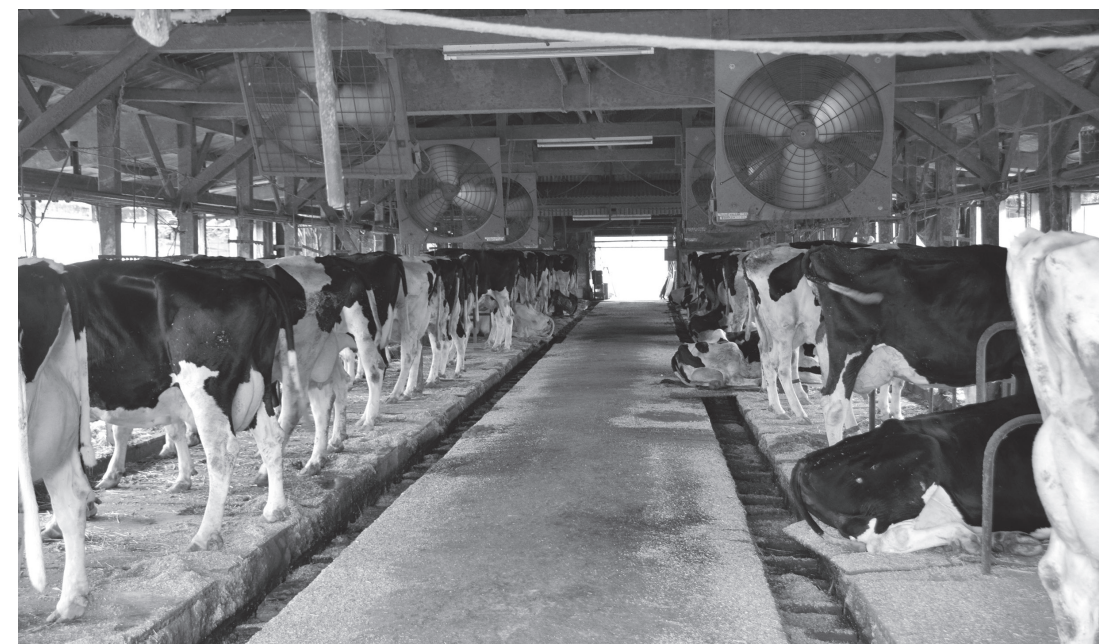
今いるブロックの仲間達は、私の考えに共感してくれる方も多く、とてもありがたいです。「命の大切さ」だけではなく、「消費に結びつく」メッセージも含めて伝えていく必要があると思います。

現状の活動は、このままでは徐々に縮小していくと思っています。でもだからこそ、そこに手を入れて、変えていきたいです。

将来的には、酪農家個人を応援できるクラウドファンディングのような仕組みを作ることも考えて

います。応援したい人が、応援したい酪農家を選べるようになれば、交牧連のあり方ももっと多様で自由なものになると思います。

現在のように酪農家から一律に拠出金をいただく形ではなく、酪農教育や酪農体験といった活動に共感し、応援したいと思ってくださる方から直接支援をいただけるような仕組みができれば、そうした活動が独立採算で継続可能となり、全国に広がっていく可能性もあると考えています。



繋ぎ牛舎

